

Title	八坂神社文書(官幣大社八坂神社發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.4 (1939. 7) ,p.160(688)- 161(689)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390700-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

め、斬罪に處せらるゝ者多く、更に長くも七月九日仲恭天皇の御讓位、御堀河天皇の御受禪となり、十三日後鳥羽天皇の隱岐遷幸、二十一日の順徳天皇の佐渡、閏十月十日土御門天皇の土佐に夫々遷幸となつた。後鳥羽天皇は御發輦の前七月八日鳥羽殿に於て御剃髮、藤原信實を召して宸影を寫さしめ之れを御母七條院に贈られ、十二日御發輦、八月五日隱岐國海士郡苅田郡現在海士村の行宮に御着、爾後、十九年の長年月の間幽居の御身となり、遷幸の御望も叶はせられず、延應元年二月二十二日遂に崩御、時に寶算六十歳同地に於て御火葬し其の御遺骨は北面の武士左衛門尉能茂入道西蓮法師が首に懸けて大原に至り、其の法華堂に納め奉つた。これ即ち後の大原陵である。又御遷幸の後、水無瀬の御殿を守護したる藤原信成親父子は遺勅を奉じ御殿の地に御影堂を建立し、御影二幅等を収めて御靈となし、朝夕、在ます如く奉齋し、子子孫孫相承けて七百年の今日に至る迄、終始至誠を以て奉仕し來るは寔に敬嘆すべきである。

猶ほ天皇崩御の後、百年にして其の精神は後醍醐天皇に承けつがれ討幕は貫徹し、一時なりとも王政は復古せられ、正平年中、後村上天皇は御立願ありて御願文を納められしも、南風競はず再び武家の世となり、更に六百年にして明治天皇の維新大業によりて天皇の御志は遂に全く成就せられるに至つたのである。

余本書を一讀し、先年、官命を以て隱岐に航し行宮の址並に御火葬塚等を拜調し、更に前後二回水無瀬宮に參拜し宸翰宸影を拜觀せしことを想起し感慨無量、方今國家内外多事なるに際會し益々神威を景仰し、神慮の加護を以て興亞の成業を祈つて止まざ

ると共に、著者の筆勞に對して敬謝の意を表す。

因に隱岐國に於ては本年の式年祭を機會に地を撰び隱岐神社を創建し、四月四日鎮座祭を行ひ、御靈を慰め奉つると共に、神徳の顯揚に努め居る。時に余左の一首を奉獻した。(昭和十四、四、廿、武田勝藏)

やすらかに鎮りませと島人の

新にいづく隱岐のみやしる

八坂神社文書

(官幣大社八坂神社發行)

本書は昭和五年京都市官幣大社八坂神社に收藏せられたる舊社務執行實壽院建内氏傳來の文書記録二千三百六十餘點を上下兩卷に分ち、同神社叢書第三回兩輯に充てられたものである。編纂は宮地直一博士監編の下に、廣野三郎氏の整理分類に當りしもので、これを總記・崇敬・祭儀・社殿・調度・神輿・末社・社僧・社人(以上上卷)壇内・社領・算用・寶物・法規・文學・雜(以上下卷)の十六款に布類せられ、其の各款の排列は年代順により、年代不明のものは推定に依り其の時代別の末に載せられる。

抑も本社は古來、祇園社・祇園天神・牛頭天王の名を以て呼ばれ、三十二社の一に數へられ、朝野の尊崇頗る厚く、其の祭禮は日本三大祭禮の一として人口に膾炙せられてゐる。又本社は貞觀十八年常住寺の僧團如が山城國八坂郷に勸請せしに始まり、後、元慶年中藤原基經が形勝優麗なる現社に精舎を建立し、觀慶寺感神院と號し、其の處に本社を遷し、以來歷朝の御崇敬深く、圓融

天皇の時より御靈會始まり、後三條天皇以後、行幸等のこと相踵ぎ、疫病流行に際しては必ず奉幣の儀ありて明治維新に至る由緒嚴然たる大社である。

終に本書は神徳の發揚に資するのみならず、學界に貢獻する處極めて多きを紹介し、方今の時局に際會し赫々たる神威を景仰し益々出征皇軍の武運長久を祈願して擱筆する。(昭和十四、四、十八、武田勝藏)

歴代詔勅集

辻善之助監修
目黒書店發行

本書は皇祖の神勅より今上陛下の軍人援護の勅語に至るまで、古來の詔勅宣命等にして、御聖徳を拜仰し得るものを中心として、國史上重要なるものを、信憑すべき史料に據りて蒐集し、便宜上、三十を神代より現代に至る各時代に分類し、御歴代中に於ては各年代順に排列せしもので、更に鎌倉時代以降は宸翰・御願文・御訓誠書・御消息・御奥書等をも滿載してゐる。又其の様式は各詔勅毎に先づ標題を掲げ、其の原文の漢文にして一般に難解のものは、其の謹譯を載せ、次に原文を擧げ、難讀の語句には振假名を付してゐる。

本書は東都出版界の重鎮たる目黒書店の開業以來、明治文運隆昌の庇蔭に因り、更に昭代の恩澤に浴し、五十年の星霜を閲したる報恩記念として、之が編纂を森末義彰岡山泰圓兩氏に委嘱して刊行し、弘く諸學校等に頒ち、以て國體の淵源の深遠なるを知得せしめむとしたものである。

書評

猶ほ所藏原文の讀方等に付きては、或は一二の異論あらむも、本書の教學の上、はた學徒の史學研究の上に多大の貢獻あるは疑はざると共に、編纂者並に書店の勞に敬意を表す。(昭和十四年四月十九日・武田勝藏)

川崎市史通史編

(川崎市役所
編纂・發行)

我が國港灣工業都市たる川崎市は、汪洋たる多摩の川口近くの部落たりし古より凡そ千數百年の歴史を有し、其の間、變遷消長ありて、今日の盛大と股賑とを見るに至りしものである。本書は先づ總論に起筆し、史前時代より現代までを六章に分ち、綱を提げ要を摘んで記述され、實に川崎市の發達史である。

川崎の繁榮の端は、家康の江戸經營であり、又五街道設置である。川崎の街道驛としての出現は、驛次創制より稍遅れ、川崎が新設加入せられ、始めて東海道は五十三次と稱呼せられ、其の置驛の年代には從來異説があり、本書は元和九年と證を擧げてゐる。爾來、問屋場・本陣等は完備し就中、寶永五年六郷川の渡船權を附與せられし以來は、次第に股賑を極め、幕末に至る迄には幾多の起伏があつた。

明治元年明治天皇の御東行の節、六郷川には船橋を用意せしも、押し來る文明開化の波は、今更の如く架橋の必要を迫り、明治十六年六郷橋が竣工し、橋行く人々は昭代の恩澤を謳歌した。其の後、兩度程、流失の禍に遭ひ、大正十四年八月現在の一大新式鐵橋の出現を見た。又其の間五年五月東京横濱間の鐵道の開通に依

(六九)

一六一